

# 農業名人 (養蚕名人)

おおつき ふみとし  
大槻 文利  
昭和20年生まれ  
箕輪町中曽根在住



## 養蚕の魅力は、期間が短く、区切りがあること

養蚕は、戦前、祖父の代から続いている。当時中曽根は水がないので田んぼができず、桑畑ばかりだった。集落70戸のほとんどが養蚕農家だったが、今は、うち1軒だけで続いている。施設と桑畑が残っているのでできる。桑畑は1町5反(1.5ha)あるが、更にJAから1町(1.0ha)借りている。専用蚕室で、春(6月中)、夏(7月中旬～盆前)、秋(盆前～彼岸)、晩秋(9月中)の4回に9箱から13箱を飼っている。1箱が40kgから50kgの繭になり、年間にしたら1.5トンくらい生産している。最盛期には3トン生産した。

今年(平成16年)は、春先の凍霜害で桑が取れないため、春は3分の1、夏は半分の収量となり、総収量は、年間1トンくらいだと思う。

蚕は、桑の量をたんと食べないと大きい繭にならないので、たっぷりくれる。5齢にもなると、朝の5時、12時、夕方6時に桑をくれる。大きくなると、桑を枝さらくれる。桑取りは2時間かかる。雨の日は特に大変。

かつて竜水社の繭乾燥施設が箕輪町の松島にあり、養蚕農家はここへ持ち込めばよかった。今は、JAが上伊那分を一括して、群馬県に持っていく。等級は、各農家毎ではなく、JA上伊那全体で同じ等級になる。上伊那の繭は、高品質で名が通っている。上伊那の繭を滋賀へ持っていき、能衣装を作っているところもある。箕輪の古田人形の衣装にも、使っていた。国産繭は、評価されていて、縦糸を国産で、横糸を中国産で織るということも聞いた。

養蚕の魅力は、区切りがあること。いつ持ってくれば、いつ上がるという期間が短くてよい。うれしいのは上手にあがった時かな。

現在は、芙蓉東海という品種を飼っている。かつては宮中ゆかりの小石丸もやったが粒が小さかった。養蚕農家がこれだけ減ってしまったのに、繭価は更に低迷している。繭の値段は、1kgあたり1等級2000円から5等級1518円で引き取られる。国の補助金や奨励金がなくなればみんな養蚕をやめるだろう。一貫目一万円という時代に戻れば、飼い手も増えると思う。

今飼っている人には、体に気をつけて一年でも長く飼って欲しい。仲間は大勢いた方がよいので。年をしてくると、重い作業ができなくなる。特に桑を切って運ぶことがきつい。都会から養蚕を応援してくれる熟年者があれば、受入も考えたい。

